

## 社会認識と自立的な精神——小宮山量平をめぐる旅

### Ryouhei Komiyama's Social Recognition and Self-Sustained Mentality

長 島 伸 一\*

Shinichi NAGASHIMA

#### はじめに

小宮山量平(1916—2012年)を研究の対象とする論考は多くはないが、彼が自らを語った文章は、必ずしも少なくはない。その中から、最も体系的に自身を回顧した作品の一つ選ぶとすれば、「来し方の記 一出版人の原体験」が妥当であろう<sup>1)</sup>。そこで、本稿を起こすにあたって、まずはその内容を確認することから始めることにしたい<sup>2)</sup>。

上田西小学校4、5年時の小宮山の担任は、自由画運動を含む信州自由教育を実践していた柳沢義信であったが、5年の夏に酒造販売を業とする小宮山の実家は破産宣告を受け、2学期からは東京の大塚に暮らす母方の叔父に引き取られることになった。転校先の担任遠藤吉兵衛は、後に分かったことではあるが、遠藤早泉の筆名で児童文学の読者を対象に日本初の意識調査を行った人で、振り返れば巡り合いの不思議さを感じずにはいられない人物の一人ということになる。

小学校卒業後の進路として担任の遠藤は、給仕を大切に育ててくれると定評のあった第一銀行を奨めてくれた。渋沢栄一が創業したこの銀行の本店検査部に配属された小宮山は、創業者の孫・渋沢敬三(監査役)の使い走りも兼ねていたため、壁面が書物で埋め尽くされた重役室の書棚から自由に本を引き抜いて読書に没頭する幸運にも恵まれた。とはいえ、平日は夜学(大倉高等商業中等部)に駆けつけなければならず、頁を繰る余裕はほとんどなかった。一方、土曜の昼過ぎの3、4時間、『中央公論』『改造』などの雑誌をはじめ、

『貧乏物語』など河上肇の一連の書物や、『マルクス・エンゲルス全集』をはじめ社会主義の著作を読み漁ることもできた。これもまた、幸運な巡り合いといえる。

渋沢敬三からは、マルクス主義の文献は読んでも「アカ」には染まるなよと忠告されていたが、1933(昭和8)年のメーデー直前に行われたデモで、運悪く逮捕され築地署に連行される。その時には「渋沢さんのおかげ」で数日後に帰宅を許されたが、同じ年の暮れにも検挙される。未成年者ゆえに、約半年後に解放はされたが、待っていたのは失業と退学処分だった。

それでも東亜商業の最終学年編入が認められ、親族の勧めもあり1935年に東京商科大学(現一橋大学)の商学専門部に入学することになった。当時の東京商大専門部は、典型的なサラリーマン養成所と見られていたが、実はわが国社会科学の最も進んだ牙城でもあり、杉本栄一や上原専禄はじめ錚々たる教官が揃っていた。杉本ゼミに所属することが許され、微視的な経済変動分析の重要性和、懐疑精神および実証精神の大切さを学んだ。大学での学びは、小宮山の将来を決める貴重な体験だった。

大学卒業後に1年足らず企業勤めを経験するが、1940年から6年間、北海道で兵役に就き、そして敗戦。45年末に上田に戻り、1947年には理論社を創業し、季刊の雑誌『理論』を創刊している。しかし、創刊号に自らが記した「巻頭言」と巻末に掲載した創作「楯に乗って」とは、GHQの検閲に遭

\*企業情報学部教授

い削除を余儀なくされた。

季刊『理論』の拠って立つ基盤は、懐疑精神を武器にして史的一元論と発展段階説とを「内在批判」し、青年マルクスのヘーゲルとの格闘の跡を「追体験」するところにあった。ところが、マルクス主義の無謬性を信じて疑わない「正統派」陣営からは、「修正主義」のレッテルが貼られることになる。

ところで敗戦は、「自立的精神」と「危機意識」の欠如が原因だった。その点を糺さなければ、いずれ第二の本当の敗戦を味わうことになる。それが小宮山の判断だった。にもかかわらず、敗戦の5年後から我が国は、朝鮮特需に浮かれて戦争の論理に巻き込まれ、あたかも危機そのものが存在しないかのような不感症に陥ってしまった。この状況を打開するには、危機に直面してもたじろがない新世代の誕生を願って、子どものうちから自立的精神を育むような書籍の出版に舵を切る必要がある。

こうして、当時としては危険な綱渡りではあったが、思い切って創作児童文学という新分野に漕ぎ出すことになった。その船出は理論社に出版文化賞や文学賞を齎すことになった。もちろんそれは、向こう見ずで冒険的な航海に挑んだ末の結果に過ぎない。が、その結果は、今江祥智、灰谷健次郎、椋鳩十、倉本聰などの豊饒な作品群を生み出すことになった<sup>3)</sup>。

本稿では、これまで簡単に述べてきたような、大学入学前の渋沢敬三との出会いや東京商大時代の教官たちからの影響、また6年に亘る軍隊経験や敗戦ショック、さらにふるさと上田での自由大学の再建、東京での季刊『理論』の創刊、GHQの検閲などの「原体験」を、小宮山自身が残した資料から復元したい。併せて、それらの体験が、どのような小宮山の社会認識に結実していったのか、その軌跡を明らかにしたい。

## I. 東京商大時代に学び得たもの

まず最初に、第一銀行時代の「原体験」を幾つか確認しておきたい。

### 渋沢敬三との出会い

既述のごとく、重役の渋沢敬三に可愛がってもらっていた小宮山は、渋沢の忠告にも関わらず、

デモに参加しビラを撒き私服警官に追いかけられる。しばらく走ると、折よく築地終点から引き返す市電が発車しようとしていた。そこで、市電に飛び乗り床に身を伏せた。助かったと一息ついた直後、当時最も戦闘的な東京交通労組の組合員の「ここにいるぞ！」という告げ口で敢え無く取り押さえられてしまう。

渋沢の介入で表沙汰にならなかったこの経験は、小宮山に次のような「アイロニーを自覚」させた。すなわち「身命を捧げてもと信じた労働者諸君から裏切られ、まぎれもない資本家の中の資本家によって救助された」という皮肉な巡り合わせと痛みがそれである<sup>4)</sup>。小宮山は、ここで階級とイデオロギーは必ずしも相即的な関係にはなく、階級を基準とする敵・味方の峻別は意味をなさない、という「原体験」をしたことになる。

もう一つ、東京商大に入学を許された直後に、小宮山は進学を支えてくれた人々に礼状を認めた。しかし渋沢に出すのは躊躇していた。それを察したかのように、先方から釣りの誘いがやってきた。退職後も釣りのお供の誘いはあり、殆どは魚より昼寝が目的のような渋沢の息抜きだったが、その日は饒舌であった。『中央公論』に連載中の林房雄の「青年」をとりあげ、渋沢は続けた。窓の外にマルセイエーズが聞こえると、窓から飛び出していくのが「若者の本性」だと林は言うのだが、そんな若者に「錘をつけるのはなんだろうね」。答える間もなく渋沢自らが応じた。「知だよ。大きな知識、大きな知恵。それらを身につけるために、せつかくの進学だ、大いに勉強をするんだぜ、な」<sup>5)</sup>。

さらにもう一つ、商大専門部への通学も始まっていた5月12日、小宮山の誕生日に渋沢の運転手がプレゼントを届けてくれた。紙包みを開けると、出版されたばかりの『モンテニュー随想録』第一巻が現れた。全四巻のうち残りの三冊は、その都度本屋から届くように手配済みだというおまけ付きであった<sup>6)</sup>。

二つのエピソードは、小宮山の大学時代を実り豊かなものにする可能性を秘めていたといえる。次に、その点を確認しよう。

### 総合的で活力のある360度の視野

小宮山が大学に入学する2年前の1933（昭和8）年は、それまでにマルクス主義という空気をたっ

ぷり吸い込んだ風船が、急速に萎んだ年であった。『千曲川』第1部には次のように記されている。「先ず高名な二人の学者の相次ぐ検挙である。一人は東京商科大学教授・大塚金之助氏であり、もう一人は元京都大学教授・河上肇氏であった」。続いて2月には、長野県で「教員赤化事件」が起き、また、小林多喜二が、築地署で虐殺されている<sup>7)</sup>。

このように1933年は年頭から、マルクス主義の思想を圧殺するような雰囲気社会に蔓延し始めていた。そして、すでに触れた小宮山の最初の逮捕は、この年4月の天長節のことであった。それから2年後に、小宮山が東京商大の校門を潜った時、社会は重苦しい空気に覆われていたが、学内の雰囲気はどうであったか。

入学4ヶ月後の1935年7月に、商大事件とか白票事件と呼ばれる学内の混乱が発生している。発端は「派閥争い」で、「主流派にとっては最も好ましくない杉村廣蔵助教授の発言力を封じる」ために、彼の提出した学位請求論文を学部教授会が否認した事件、それが混乱の原因であった<sup>8)</sup>。これに対して、学生会理事の大平正芳<sup>9)</sup>は、夏季休暇明けに渦中の人・杉村の講演会を開いて、学位論文を否決された著書(『経済哲学の基本問題』岩波書店、同年9月刊)の中で杉村が提起した学問上の問題を全学で考えてみようという企画を捻り出した。「一番高い波頭の上で」—それが演題であった<sup>10)</sup>。

講演のポイントは、その演題が雄弁に物語っていた。「かのアダム・スミスからカール・マルクスへというひとすじの潮流のみではなく、スミスからフリードリッヒ・リストへ、またマルクスからマックス・ウェーバーへと、注目すべき諸潮流が互いに擦り合って、巨きなうねりへと盛り上がりつつあります。たまたまそれらのうねりの一番高い波頭に上りつめた一しゅん、私たちはぐるりと360度の巨きな視野を自分のものとするのが可能なのです。「諸君はこの学園に入ってから、二言目には『キャプテン・オブ・インダストリー』などと聞かされ、時代のリーダーとなるようにと励まされているはずですが、けれども、以上に述べましたような大きな変革の時代に当たって、もしも諸君が、真に総合的で活力のある360度の視野を身につけることを怠ったならば、諸君はみずからクラーク (clerk) つまり一事務員たる道を選ぶことになりましょう。縁あってこの学園でめぐりあ

うことのできた私たちが、さて、どんな道を進むことになるのか。それを共に語りあうための提案を、今回の私の著作には潜めておいたつもりなのです<sup>11)</sup>。

この杉村講演が指摘するように、1930年代半ばは「大きな変革の時代」の只中であつたが、そうであればこそ、唯一絶対の基準で社会を見るのではなく、「注目すべき諸潮流」を見渡せるような「一番高い波頭の上」に立って、多角的かつ複眼の視点から社会を診る必要がある。この講演が小宮山に強烈なインパクトを与えたことは、後に季刊『理論』第5号に杉村の演題と同タイトルで自らの原稿を掲載していることから明らかである<sup>12)</sup>。

### 学び得た豊かさの内実

大平正芳が杉村廣蔵の崇拜者だったように、小宮山はゼミの恩師・杉本栄一から多大な影響を受けた。とりわけ、小宮山は、杉本が「最初に概念・シエーマがあつて、その裾野の上に学問を展開するのではなしに」、「市場論のほうから」つまり「微視的な研究から本質に迫るという資本主義のアプローチ」を採用した点を高く評価する<sup>13)</sup>。

正統派のマルクス経済学から杉本は「修正主義」と批判されたが、正統派の方法そのものに疑問を投げかけたのが杉本の出発点である。そうである以上、杉村の「総合的」認識と杉本の「微視的」認識、この二つの認識を組み合わせる「複眼」で社会を視るという立場を原点としなければならない。これが小宮山の学んだことだった。

その点は、上原専祿から学んだこととも共通する。上原は、小宮山に「史的一元論で学問をしてはいけませんよ」と注意してくれたという。唯物史観を無謬の公式と考えれば、進歩史観に基づく発展段階説が生まれるが、歴史はそもそも公式に導かれて説かれるものでも、完璧な社会に向かつて一直線に進歩・発展するものでもない。抽象的な公式論から脱却すること—それが、小宮山が上原から学び得たことであった。

もう一人、小宮山の思想形成に豊かな影響を与えた教師がいる。戦後に『イギリス社会哲学の成立』(弘文堂、1948年)を出版した太田可夫がその人である<sup>14)</sup>。小宮山は、当時の時代状況を踏まえて自らを「転向世代」と位置づけ迷っていたが、太田は次のように語りかける。「今のきみにとって

は、共産主義とか社会主義という理想そのものを確かめることよりももっと大切なもの、それらに対する自分の歩みを改めて確かめてみずにはいられないという誠実さこそが大切なんだろうな。「この日本での思想の自由への圧迫の重苦しさが、今やすべての若い人たちから、すでに自分自身へのそういう誠実ささえも奪い去ろうとしているんだろうな」。

この太田の呟くような発言を聞いて、小宮山は「そうなんだ」と気づく。「ぼくはまぎれもなく転向者なんですね。ただ、誰かを裏切ったとか、何かに挫折したとか言うのではなく、不意に行き場を失ったんです、目的を奪われたんです。だからこそ、改めて自分の頭と足とで自分の行き場を探し求めなければならぬいんでしょうね。……そういう自分にふさわしい探究こそが、ぼくのような転向世代の生き方だと思うんです」<sup>15)</sup>。

この太田との対話を通して、小宮山のその後の方向が定まった。つまり「自分の頭と足とで自分の行き場を探し求めなければならぬ」、それが転向世代の生き方である。誠実さ (fidelity) と自立的精神というキーワードを掴んだ原体験が、太田との対話であった。

## II. 停学処分・軍隊経験・雑誌の発行

東京商大を1938年3月に卒業するはずであったが、1937年11月に不本意な停学処分を受け、卒業が1年繰り越しになった。卒業後は旭硝子に就職するが、1年足らずで軍隊に入隊し、その後6年間を北海道で過ごすことになる。その話に入る前に、停学処分の一件も小宮山の思想形成に大きな影響を与えているので、ごく簡単に触れておきたい。

### 停学処分の顛末

きっかけは東京商大の国立移転を巡って起きた学生運動であった。この一件は、西武資本の土地会社が、学園都市開発を目論み、その誘導に乗った学長が利権と学閥を形成したという黒い噂を契機に拡大していった。学閥の支配する教員集団の中には、無能教授も含まれており、彼らを排斥するために学生大会で授業ボイコットが決議された。

ところがそれを察知した大学側は、ボイコット決行の前日、その挙に出た学生には「処分」を以って臨むという通達を出し、学生たちは一転してボ

イコット中止を決定した。しかし、小宮山と級友の二人は、後輩の長兄の戦死の悲報を耳にして、二日に亘り彼の家に駆けつけ、前日の中止の決定も知らずに、当日は疲れ切って級友の下宿で昼過ぎまで眠り込んでしまった。待っていたのは「停学ニ処ス」だった<sup>16)</sup>。

これには後日譚がある。級友は近江商人の御曹司だったので、二人は、停学期間を活用して大阪に移り、手当たり次第に貴重な古本を買い漁った。1ヶ月ほどで「八畳ほどの床の間付きの一部屋を足の踏み場もないほどの書庫」に変えてしまった。ところが、1938年3月に、各人宛に上原専禄の名で直筆の手紙が届いた。——停学処分は不当ではないか、との疑義が教授たちの間から出て、その不当性も認められた。ついては不服と言い分も含め、復学について充分に話し合いたいので学務課まで出向いてほしい。

上原を含む三人の遣り取りの末に、結論は次のようになった。大阪で始めた思索が面白くてたまらない。毎日の時間が楽しく、大学どころではない気がする、と小宮山。上原が、つまりは自由に勉強したいというわけね、と確認し、それが認められることになった<sup>17)</sup>。大学の識見と上原の誠実な対応によって、二人に一年間の読書の時間が贈られたのだ。

### 戦陣訓と死生観

当時の大学は三年制だったが、二度目の3年次は読書三昧の充実した学生生活を堪能することができた。なかでも渋沢からのプレゼント『随想録』は、懐疑精神を培う宝庫だった。学生課の斡旋で、三菱系の旭硝子で勤めを始めたが、翌1940年初めに「入隊ノタメ休職」の辞令で退社、2月に旭川の第7師団歩兵第27連隊に召集された。一兵卒を選んだ小宮山の選択を、友人は「何を好き好んで」と批判したものだった<sup>18)</sup>。

やがて幹部候補生志願者のための試験が行われ、小宮山もそれに加わった。「戦陣訓」が公布されたのは41年1月で、試験はそれ以前の実施だったこともあり、出題は「死生観について」という意外なテーマであった。小宮山の答案の末尾は「生きテ、生きテ、如何ナル苦境ニ遭遇スルモ、ヒタスラ生きヌクゾ」との勇ましい言葉で閉じられていたが、試験にはパスして上等兵の肩章を付けることに

なった<sup>19)</sup>。

小宮山が一兵卒で入隊した当初と、上等兵になり初年兵教育に携わるようになってからとで、兵士の死生観には明らかな変化が生じていた。しかも、その変化は「戦陣訓」の公布前後に起きているという実感が、徐々に強まっていった。実際のところ、幹部候補生試験で「ヒタスラ生キヌクゾ」と自らが書き付けた頃と、アジア・太平洋戦争が勃発して半年後以降の頃との死生観の違いは明白であった<sup>20)</sup>。

しかもその違いは、徴兵制が本来の機能を果たしていた時期と、徴兵制に機能変化が齎され「傭兵化」した時期との違いでもあった。徴兵制は、「短い期間奉仕したならばくにへかえって、くににいて在郷軍人として奉仕する」、つまり「生きて帰ることを前提」にした制度であった。戦争中にたとえ捕虜になったとしても、「戦時国際法にもとづき相手国の保護を受け」「故国へ無事に帰れる」ことになっていた。

ところが「戦陣訓」後の日本では、「生きて虜囚の辱を受けず」という文言が象徴するように、国際ルールを無視するような雰囲気蔓延してしまった。徴兵猶予が停止され「学徒出陣」が行われた頃には、〈名誉の戦死〉や〈玉砕〉が流行語となり国中が「死の哲学」で覆われ、「生きて帰る」が「死んで帰れ」に180度転換した。これが初年兵教育から得た小宮山の判断だった<sup>21)</sup>。

しかも「戦陣訓」は、「日本の軍隊を新しい戦闘集団へと変質」させつつあった。かつての徴兵制には、「兵隊たちの誰もが家を背負い、故郷を胸に刻んでいる」といった独特の要素があったが、「戦陣訓」以降の動員は、日本の軍隊を「傭兵化」しようとしている。なぜなら、「徴兵に名を借りて」赤紙一枚で「いつでも、どこへでも」動員することができ、母親も「戦闘力としてわが子を手放す」ことを、認めているように見えるからだ<sup>22)</sup>。

だが、それは世間の雰囲気が求めているものであって、母たちの本音ではない。しかも戦場で散華する若者たちを、「日本という大地を深く耕す立場で考えてみると」、彼らは「現代日本そのものの種子」であり、「未来につながる生命体」である。この国では将来の日本を「深く耕す」ことのできる若者を粗末に扱っているが、「この大切な種子は、あくまでも温存」せねばならない<sup>23)</sup>。にもかかわ

らず、という彼の切齒扼腕が直に伝わってくる。

ところで、時代に反旗を翻すようなこうした判断は、戦時下に大学時代の師や友人たちと雑誌の発行に携わってきたことと無関係ではない。その点に触れておこう。

### 時流を逆手に『統制経済』発行

ただし、小宮山はこの時期は旭川にいたので、そう頻りに編集会議に出席できたわけではない。しかし、創刊号が1940年9月に発行されたこの雑誌には、のちの季刊『理論』の「芽が吹いていた」と語っている。世はまさに、政治も経済も暮らしても統制に傾斜していく時代であった。したがって、時代の潮流に「あからさまに抵抗できる」わけではないし、「戦争に協力した面」もある。が、同時に「抵抗の跡」もみなぎっていた。誌名は、時代に迎合するような装いを取りながら、総力戦の時代を逆手にとって、「反語的な意味で」つけられたと指摘している。編集兼発行人は東京商大の教官・常盤敏太であった<sup>24)</sup>。

小宮山がこの雑誌を評価する最大のポイントは、懐疑精神を出発点にしながら、資料的裏付けを取ることによって、当初の疑問を実証してみせるその手法である。しかも、それが可能であったのは、雑誌編集部が、満鉄調査部と満鉄が鞍山に設立した製鉄所とのパイプを持っていたからに他ならない。この点について小宮山は、以下のように述べている。

「昭和16（1941）年12月8日の直前のころ、日米開戦の非をとなえる資料が私たちの雑誌『統制経済』誌宛に送られて来ていた。……その発信者は後の作家五味川純平こと栗田茂であり、その資料の提供者（は）満鉄調査部の具島兼三郎である。資料は当時世界の戦略物資16品目の保有量の比較で、米72%に対する日本2%という比率であった。それでも尚開戦に踏み切るとすれば、……第一に徹底した奇襲作戦が必要であり、第二に南方資源の迅速な篡奪が不可欠であった」<sup>25)</sup>。

開戦直前の戦略物資保有量の日米比較が1対36という数字は、「日米開戦の非をとなえる」に足る十分な証拠であろう。歴史の経過を迎れば、開戦を回避する動きもあった。しかし追いつめられて、踏み切らざるをえなくなり、小宮山の言うとおり奇襲攻撃と南進による戦略物資の篡奪しか残され

た道はなかった。奇襲作戦は、半年間是有効に機能したが、42年6月初めのミッドウェー海戦を機に後退を余儀なくされる。長期戦になれば勝機はないことは自明であったが、戦争は始めるに容易く終えるのは難しい。玉砕という選択肢に手をつけて、「未来につながる生命体」を極めて粗末に扱った末の敗戦であった<sup>26)</sup>。

学生時代に、太田可夫との対話から浮かび上がった自立的精神（自分の頭と足とで自分の行き場を探し求める心の習慣）は、編集部が外部の情報提供者の協力を得て、「懐疑精神skepticism」を武器にしながら、資料や統計に裏付けられた「実証精神positivism」を発揮することによって、当初の疑問を証明してみせる方法にまで発展したのである<sup>27)</sup>。その限りでこの雑誌は、季刊『理論』の「前史」をなすと見なすことができる<sup>28)</sup>。

### Ⅲ. 敗戦と自立的精神の涵養

71年前の8月15日に、我が国は終戦を迎えたのではなく敗戦を経験したのだ、というのが小宮山の立場である。なぜ敗戦なのか。終戦という言葉からは、戦争の「歴史を反省する」ことも、戦争を止められなかった「責任を果たそう」という行動も生まれにくい。失敗の歴史を反省し、自らの責任を果たさない限り、「戦争の呪縛」に取り憑かれ、悪しき歴史は繰り返される。無謀な戦争に至る経過を丹念に辿り、なぜ戦争を避けられず敗戦という「高価な犠牲を払う」に至ったのか。それを検証することなしに、二度と戦争はしないと固い決意は得られない、と小宮山は考える<sup>29)</sup>。

敗戦は「素通りを許されぬ転機」であったはずだ。ところが、敗戦直後のほんの一瞬に多くの日本人が感じた「無私無欲の理想への渴望」は、長続きしなかった。のど元過ぎれば、の諺どおり「難関をカスリ傷のように受け流す」習慣に逆戻りしたからである。「隣国と境界を接する」ゆえに、敗戦を幾度となく味わってきた西欧では、「市民社会的な節度」が身につけている。他方、史上初の敗戦を味わった日本は、周辺諸国との交流一つ取っても、「戦前の『君が代精神』そのままにエコノミック・アニマルとして反感をうけ」、敗戦の重みを「素通り」している有り様である<sup>30)</sup>。

戦後の8月の歴史を振り返ると、「各種メディア」は敗戦を「負の記号」で捉え、「その精神的外傷＝

トラウマから立ち直ろうではないか」と懸命に「国家・国民」を励ましてきた。しかし、そのことが逆に「日本人の歴史認識を曖昧にし、国際社会への正当な姿勢を見失わせてきた」。敗戦は「負の記号」どころか「戦後復興の原動力」であった。平和憲法も「他からの強要」ではない。敗戦によって齎された「内なる悲願」の成果と見るのが小宮山の認識である<sup>31)</sup>。

ところで、戦争を阻止できなかった理由は、言うまでもなく一人一人が「自立的精神」を欠落させたことにある。「世界的な視野」が求められていたにもかかわらず、一人一人が視野狭窄に陥り、世界の思想・学問の趨勢に背を向けて「教条主義」へのめり込み、「独善的な歴史認識」から脱却することができなかった。要するに、自立的精神の欠如、これが戦争を阻止できなかった理由だ、と彼は考える<sup>32)</sup>。

それでは、自立的精神を涵養するにはどうすればよいのか。出版人、編集者としての小宮山は、当然のことながら、読書が自立的精神、「自分の頭で考える」人間を育てるという。日本人の欠陥は「自分で判断力をもつことに欠ける人間が多い」ことであるが、「時代に対してしっかりと反逆できる」日本人を育てるためには、できれば子どもの時から読書の習慣を身につける必要がある、ということになる<sup>33)</sup>。

もちろん、自立的精神は、読書の習慣がそうであるように、主体的な努力なしに自然に身につくような代物ではない。むしろ逆に、異物を入れられたアコヤ貝が、苦しみながら粘液を出してその異物を包み込み、その結果、体内に見事な「真珠」を宿すように、「粘り強く苦しみに耐え」ながら「自分の頭で考える」習慣を積み重ねた末に、初めて手に入れることができる<sup>34)</sup>。考えるという自主的な行為を放棄すれば、「自立的精神」というこの至宝を自らのものにはできない、というわけである。

最近よく地方の「活性化」などという言葉が囁かれるが、「迫力ある村」を創り出すのは、「産物」でも「儲け仕事」でもない。活性化の担い手は、「自分の頭で考える自主的な人間」以外にない。その点を踏まえない限り、「あたかも時代の安全弁に随して行く若者たちの無関心の深まる現象」に歯止めをかけることはできない。地方活性化をス

ローガンに終わらせないためにも、小宮山の憂いはけっして浅くはないのである<sup>35)</sup>。

#### IV. 千曲文化クラブと再建上田自由大学

敗戦後、上田に戻った小宮山は、「旭川の将校生活の収入」を注ぎ込んで手に入れた蔵書を元手に、千曲文化クラブという名の「貸本屋」を始めた。もちろん彼には、「戦争下の苦難」と引き換えに得た「〈大ヒューマニズム〉を見失わずに」、誇りある自立的な精神を地域で育て活かし通せるか否か、それが問題だった。幸いにして、「人びとは本に飢えていた。集まる若者たちの胸には、祖国の明日の命運が去来していた。毎夜のように研究会は開かれるのだった」<sup>36)</sup>。学びへの熱気が、敗戦直後の地方都市にはあったのである。

この貸本クラブを勧めてくれたのは高倉テルだった。高倉は大正末期から昭和初期に開講された信濃（上田）自由大学で文学論を講義した名物講師であった。やがて、小宮山と高倉は、この千曲文化クラブを事務所にして、自由大学の再建を果たすことになる。

高倉に勧められて始めた貸本屋であったが、敗戦直後の日本共産党は、この小宮山の試みを快く思わなかったようである。「今日が必要とするのはボリシェヴィキであってインテリゲンチヤではありません」というのが、その理由であった<sup>37)</sup>。当時の共産党は人民を指導する前衛政党と自らを規定していたから、読書と研究会を続ける教養人・知識人よりも社会変革をめざす革命家を必要としていた、ということであろう。

しかし、当時も今も地域に必要なのは、外部からの指導ではなく、「自発的な精神の高揚」でなければならない。必要なのは、地域に住む一人一人が読書や研究会を通じて「自立的な自由を自覚」して、「成り行きの価値観から解放」され、自らの価値観を掴み取ることではないか<sup>38)</sup>。個人と集団の潜在能力を引き出しながら、「自分の頭で考える」訓練を通じて、「自立的精神」を養い育てる教養人こそが、地域で求められている人財（財産）ではないか。そういう小宮山の確信が、上田自由大学の再建に繋がっていくのである。

再建された上田自由大学は、1945年12月の高倉テルの「文学論」に始まり、46年2月に平野義太郎の「民主主義思想史」、5月初めに高倉テルの「文

学論」と同月末に山田盛太郎の「農業経済」、6月に平野義太郎の「民主主義思想史」、8月に大内兵衛の「財政学」、9月初めに羽仁五郎の「明治維新史」と同月末に風早八十二の「資本論解説」、11月に祢津正志の「日本古代史」の計9講座が開講されている<sup>39)</sup>。

戦後最初の高倉の講義は12月27日に開催されたが、その一週間前、12月20日付けの「上田自由大学趣意書」が残されており、その冒頭で「再建の趣旨」が次のように記されている。「この度の敗戦によって吾々は日本人の国民としての民度が如何に低いかをはっきりと知り、愈々自由大学の使命の重かつ大なる事を知りました。今後の我国は戦前と対蹠的な組織となるべく各個人の自由が強調せられることゝなります。上田自由大学は、その地方一般人の道徳と知識の向上とを目的とするは勿論この教育趣旨を国内各地に及し、以て民度の向上を期するものであります」<sup>40)</sup>。敗戦により「民度」つまり国民精神の成熟度の低さを知ったという認識は、小宮山の「自分の頭で考える」「自立的精神」が涵養されてこなかったという認識と重なるであろう。

また、高倉の講座が開講される1ヶ月前の11月26日には、高倉、小宮山、山越完吾3名の「常任世話人」が他の7名に呼びかけた「復興準備会」が、別所温泉かしわ屋別館で開催されている。その案内文には、会合は午前10時より午後7時頃までの予定とあるから、先の「趣意書」はこの「準備会」で検討・確定したものと考えられる<sup>41)</sup>。

ところで、戦後の自由大学は、大正期および昭和初期に開講された自由大学と比べると明らかな違いがある。最大の違いは開講日数で、大正期には1講座5日ないし7日連続で、昭和初期でも3日ないし4日連続で開講されたが、戦後は1日だけの開講に留まった。また、戦前には農閑期に集中していた開講が、戦後は9講座のうち6講座が農繁期に開講されているという違いもある。しかし、何と云っても見逃せないのが、開講期間の違いである。大正期には5期連続で6人の講師がほぼ5日連続で、つまり1期（1年）当たり30日分の講座が開講されたが、戦後は僅か1年間で中断し、9日間しか開講されなかった。

中断の理由について、小宮山は以下のように述べている。上田自由大学の起源は、「東大へ行くア

カデミズム」ではなく、学びへの情熱をもった地域の住民が講師を招いて開講した「民衆的アカデミズム」である。戦後の自由大学も、「もっと勉強したいのに、地域に埋もれるしかない」状況を脱却したいと考える住民が再建した「民衆的アカデミズム」といえる<sup>42)</sup>。したがって、自由大学は「無限に人々の中に広げてゆくべき運動」という性格をもっていた。ところが、「今時、階級性も出てこない話をしてどうなるか！」と共産党から「突っ込まれ」、講座に参加していた「仲間を刈り取られていく」ことになってしまった。小宮山には「その前に立ちはだかって闘う」という時間的余裕がないままに「看過しているうちに、自由大学はすっかり左翼・共産党系に乗っ取られた運動になって」「当然のこと、自滅してしまう」ことになった、というのである<sup>43)</sup>。

要するに、昭和初期の自由大学運動が抱えていた課題、それと同じ課題に戦後も直面して短期間で終焉を迎えたということになる。小宮山は、既に見たように、東京商大時代に特定の思想（史的一元論と発展段階説）だけを学ぶのでは不十分で、特定の思想から自由にならなければならない、という多元主義（pluralism）の立場に立っていた。その路線に対して、「ポリシェビキ」や「階級性」の立場からの批判が生まれて路線対立が深まれば、誰にでも開かれていた「民衆的アカデミズム」が機能停止に陥り、自壊してしまうのはいわば当然のことであった<sup>44)</sup>。

## V. 季刊『理論』の創刊とGHQの検閲

再建自由大学の運営をめぐる路線の溝が深まっても、小宮山には手の施しようがなかった。というのも、戦争中に友人たちと発行していた雑誌の後継誌を、自らの編集方針で出版する魅力の虜になっていたからである。そこで、1946年の後半には、上田で自由大学に関わる傍ら、東京で出版社を興し雑誌を出版する準備が始まった。

### 季刊『理論』の創刊

理論社が創業されたのは1947年で、季刊『理論』の創刊号の奥付によれば、その発行は47年5月となっている。もっと早く創刊する予定であったが、「資金も乏しく、組織のバックアップも」ないまま「刊行が遅れ」、「民主主義科学者協会の機関誌『理

論』刊行が予告され」たため、それと区別するために季刊『理論』と名乗ることになった<sup>45)</sup>。なお、理論社が刊行した最初の著作は、1948年の堀江邑一・都留重人・杉本栄一『近代理論経済学とマルクス主義経済学』であった。

敗戦直後は、評論と名のつく雑誌が数多く出版されたが、小宮山は誌名を「理論」にこだわった。評論には外在的な批評といったニュアンスがあるが、理論は物事を鵜呑みにせず「なぜ」と問い続け、その疑問を「解き明かす」内在的な行為から生み出されると考えたからだ。言い換えれば、「懐疑主義skepticism」つまり「限りなく疑う」ことが大切であって、戦中の雑誌『統制経済』と戦後の季刊『理論』とは、懐疑主義で一貫している、ということになる。答えが出ると安心してそれ以上の考えをストップしてしまう心性ではなく、疑い続けることの方が大事だという心性の一貫性である<sup>46)</sup>。

ところで、季刊『理論』創刊号の表紙裏には、6つの「本誌の特色」が掲げられている。その要点をまとめれば、以下のとおりである。

1) 今日の日本の問題を処理していかなければならない役割をもつ30歳前後の青年の手になる雑誌。2) 教える雑誌ではなく自ら求める雑誌。3) 謙虚と寛容を要件として理論の貧困から立ち直り、理論の実践性を確保するための雑誌。4) 一つ一つの問題に全一冊をささげて学者の協同作業を図る雑誌。5) ステップティシズムによって代表されている30歳前後の青年を含む広汎な知識階級の停滞と怯懦への鞭となるような雑誌。6) 出版コマースリズムにはできない仕事をやることに意義があると考え、日本の希望・祖国の命運を高く掲げた雑誌<sup>47)</sup>。

啓蒙誌ではなく「自ら求める雑誌」という位置づけはユニークである。「謙虚と寛容」を掲げている点は、勇ましい左翼路線をとらない意思表示と見なされる。左翼路線には、「どこかで誰かが指導して、どこかで誰かが救われる」という構図がつきものである。「一方にすべてを知りすべてを裁く者がいて、他方に、何事も知らず裁きに任せる者がいる」という構図では、「憎悪や叫びは生まれても、危機の深さに対する主体的な認識」は育たない。それでは「理論の貧困」を乗り越え「理論の実践性を確保」する道を拓くことはできない<sup>48)</sup>。

したがって、季刊『理論』は、「憎悪や叫び」で

はなく、「謙虚と寛容」を掲げることになる。「分裂や対立」に対しては、「統一や協同」を対置することになる。そうでなければ、疑い続け、その疑問を解明する理論的思考の場を創り出すことはできないからである。敗戦によって「停滞と怯懦」に襲われているインテリ層に、叱咤激励の「鞭」を揮って、祖国の命運を共に真摯に考える機会を提供したい。それが出版に込めた意思であった。

敗戦は、ともすれば「どんでん返し」と受け止められがちであった。戦前の「学問・思想・体験の大部分に対して最大限の断絶を宣告し、新しい時代の到来を告げる」ことが、出版界の主流であった。むしろ逆の診たてが必要ではないか、と小宮山は考える。昭和戦前期は、「日本の精神史の上で稀な蓄積過程を歩んだ」という診断がそれである。戦前の20年間は、彼によれば「近代的な懷疑精神が日本に定着しかけた」時期であり、「実証的な経験主義的な精神過程を形成しかけた」時期であった。

懷疑と実証の精神的な緊張関係の重要さ、これこそ敗戦を契機に再確認すべきである。敗戦による「どんでん返し」と新時代の到来、といった安易な判断を捨てなければならない。「昭和が築いた精神過程」は、「天皇制の抑圧体制」によって見えにくくはなっているが、敗戦と民主化とを「結節点」として、戦前と戦後との継続性・一貫性を究明すること、それが季刊『理論』に課された課題であった<sup>49</sup>。

ところで、創刊号に掲載された杉本栄一の論考「近代理論経済学とマルクス経済学」は、この雑誌が求めていた「内在批判という方法」を決定づけるほどの重みをもっていた、と小宮山は評価している。一方、小宮山自身は、マルクスの思想の「出来上がった成果」だけを利用したり解釈したりするだけでは不十分で、「思想の形成過程に即して」、その思想を成立史的に研究する必要性を感じていた。恩師の上原専祿は、それを「追体験」という的確な言葉で整理してくれた。この追体験的な研究を通して、季刊『理論』の「創造的マルクス主義」の学風が導き出せる、という小宮山の確信が生まれた<sup>50</sup>。

その点と関連させて、彼は次のように述べている。「だから、どんな学問であろうとね、その『形成過程』に学問の値打ちを置くならば、やがてそ

こに統一的なものが生まれる。しかし結果だけを味わってお互いにその解釈を並べ合ったら対決しかない<sup>51</sup>。

鶴見俊輔は、『戦後精神の行くえ』に差し挟まれた「推薦のことば」の中で、この文章を引用して「この本の名言として私がおぼえておきたいもののひとつ」と述べているが、完成された学問の訓詁学を毛嫌いした、統一体質の鶴見らしい評価と見なすことができる<sup>52</sup>。

### GHQの検閲から学んだこと

創刊号のために、小宮山はペンネームで創作「楯に乗って」を活字にしたが、GHQの検閲に遭い掲載することはできなかった。この小説は、スバルタの母親たちが息子を戦場に送り出す際に、敵国の兵を倒すか、さもなければ死んで楯に乗って帰れと告げたという故事になぞらえ、日本のために出征した兵士たちの思いを描いたものであった。義務としての徴兵制の時代には勤めを終えれば「生きて帰る」ことが前提であったが、戦陣訓時代は「死ぬ気で」「楯に乗って帰るつもりで」入隊してきた。そういう状況と重ね合わせて、小宮山はこの作品を書いたという<sup>53</sup>。

当時はGHQの検閲の真只中だった。この創作は、「われわれはたしかに軍事的には敗れたけれど、真の敗戦はやがて統一体質を失った時にくるだろう」という問題意識のもとで書かれたものだった。小説の背後に隠されていたメッセージは、「だから今こそ統一体質を思想的に深く探求していこう」というものだった。進駐軍は、「分裂させて支配せよ」を統治の手法としていたので、それとは逆をいくこの作品を見逃すはずがなかったのである<sup>54</sup>。

検閲は、戦時中の日本でも行われていたが、そのほとんどは伏せ字にせよとの指導で、文字数も同じだった。したがって、文脈からある程度は類推することができた。しかし、GHQの検閲は、徹底しており巧妙でもあった。「楯に乗って」は全面削除であったし、小池基之が執筆した「農業民主化への道」は、部分削除ではあったが、GHQの行う農地解放は不十分なものだという批判部分を「段落ごと」に削って、「痕跡を残さないようにする検閲」であった<sup>55</sup>。また、日本共産党の機関誌『前衛』などは検閲の対象にはならなかった。読者も関係者に限られ影響は大きくないと判断された

ためだ。ところが、『前衛』に書いている筆者が大衆誌に書くとなれば話は別で、その影響を考慮して厳しいチェックが入った<sup>56)</sup>。

GHQの占領政策の背後には、H.ノーマンやK.ウィットフォーゲルなど「大変見識の高い東洋学の大家」が控えていた。戦後の民主化構想は、彼ら「極めつきの左派の論客」が練っていたことを想えば、巧妙な検閲はお手のものであった<sup>57)</sup>。「GHQの方針批判はもちろんだが、とりわけシリアスな国民的統一への悲願にみちた労作」に対しては、「検閲のメスが容赦なく執刀」された<sup>58)</sup>。言い換えれば、「真にパトリオティックな、右翼的な意味でなく愛国的な、祖国愛に燃えた要素があると判断された場合、かなり敏感に検閲に引っかかった」のである<sup>59)</sup>。

ここには、「祖国愛に燃えた要素」と、「右翼的な意味でなく愛国的な」要素とが等置されており、それらと「右翼的な意味で」の「愛国的な」要素とは異なると理解されている。つまり、小宮山は、真のpatriotismと悪しきnationalismとは異質のものだ、と理解している。その限りで、小宮山の考え方は、ナショナリズムには批判的だがパトリオティズムは肯定するG.オーウェルの考えに近いと判断できよう<sup>60)</sup>。ところが、GHQにとっては逆であった。国家や国境や領土を問題とする愛国心nationalismはさしたる懸念材料にはならない。しかし、「くに(故郷、祖国)」に住む「ひと(人間)」としての「Aさん」「Bさん」を想定し、彼らの内側に日本があり外に外国があるという考えを採らない祖国愛patriotismに対しては、GHQは「敏感に」反応せざるを得なかったのである。

そのことは、小宮山が80歳を過ぎてから書き始めた400字詰め原稿用紙2500枚の大作『千曲川』(全4部)の中に、次のような検閲官の発言として記されている。

「あなたのこの作品は、私たちが最も好まない内容のものです。共産主義的な左翼でもなく、軍国主義的な右翼でもありません。今度の戦争を否定するのでもなく、肯定するのでもありません。ただ、人間による人間に対する加害の状況が、深く追求されているようです。

この作品を読むと、単に日本の軍国主義者ばかりでなく、連合軍というデモクラシーの勢力までもが、人間に対する加害者として書かれている

ようです。

今回提出された長い原稿まで読んでみて、そのことを一層強く感じさせられました。やがてあなた方は、あの原爆をも含めて、人間の人間に対する犯罪を非難せずにはいられなくなるでしょう。今や私たちがいちばん警戒しているのは、そのようなテーマなのです<sup>61)</sup>」。

## おわりに

これまで述べてきたように、小宮山量平の思想や社会認識は、さまざまな巡り合いの原体験を介して生まれ深められたものであった。小学校4年の担任だった柳沢義信による信州自由教育との出会いは、のちに理論社が子どもの本づくりに路線を切り替えた際に、その背中を押してくれた原体験であった。洪沢敬三との巡り合いからは、偏見なしに人を評価する重要性和、懐疑主義の元祖モンテーニュをはじめ良書が人を創ることを学んだ。

大学の恩師からは、さまざまな教えを受けた。杉村廣蔵からは、総合的な「時代の総括者の眼」をもつ必要性を学び、杉本栄一からは微視的な認識を学び、両者を併せた複眼の視角こそが自らの社会認識を深める際の基本になるという点に気づかされた。また、上原専祿からは、マルクス主義が金科玉条とする唯物史観と発展段階論を含め懐疑精神で臨むことと、思想の形成過程を重視する小宮山の方法を「追体験」というキーワードで表現することを教えられた。太田可夫との対話からは、誠実さfidelityを取り戻すために自分の頭で考える自立的精神の重要性を学んだ。

また、軍隊経験は、自らの世代と戦陣訓世代との死生観の違いや、傭兵化による若き命の簒奪という国家悪に気づく機会を与えた。他方、戦時下で発行した雑誌は、外部の協力を得て、実証精神positivismに裏打ちされた懐疑精神skepticismを発揮して開戦の非を唱えたが、為すすべもなく高価な犠牲だけが残された。しかし敗戦は、小宮山にとっては素通りを許されぬ転機になった。なぜ戦争を止められなかったのか。時代に流されないために、自立的精神をわが物とする訓練の重要性を再確認する機会になった。世界的な視野の欠落と独善的な歴史認識が、開戦と敗戦へ至る道であるとの認識を深めた。

そのために何をなすべきか。自立的精神と地球

規模の視野と学問の裏付けをもつ歴史認識とを手に入れるためには、個人の営みと協同的な営みとを擦り合わせる必要があろう。小宮山が自らに課し、地域に拓いた試みは、読書習慣を身につけるための貸本屋の店開きと、求めに応じて出向いた研究会と、民衆のアカデミー自由大学の再建であった。自由大学では、特定の思想を学ぶためではなく、自らの思想を形成するための複眼的な学びの提供が彼の流儀であった。従って、権威からの脱却liberalism、多元主義pluralismおよび折衷主義eclecticism<sup>62)</sup>をめざしたが、権威の信奉者との間に路線対立が生まれ、長く続けることはできなかった。

敗戦は、世間では「どんでん返し」と受け止められ、戦前と戦後を断絶と認識する風潮が蔓延った。小宮山はしかし逆の判断を下す。1930年代は「懷疑と実証のシンフォニー」<sup>63)</sup>が奏でられた精神上豊かな一時期であった。敗戦は過去の歴史を放棄した新たな出発を意味するのではない。敗戦を契機に戦前の成果を戦後に引き継ぐことを考えねばならない。この戦前・戦後の一貫性・継続性の主張は、同業の出版人安江良介によって評価を受けることになる<sup>64)</sup>。

敗戦2年後、小宮山は理論社を創業し、季刊『理論』の刊行を始めたが、革新勢力の間には分裂体質が芽生え始めていた。執筆陣には、上原専祿、杉本栄一らに加え、都留重人、武谷三男、大熊信行、梯明秀ら統一体質の研究者を選んだことが、小宮山の編集方針をよく示している。この季刊雑誌の発行は、GHQの検閲を介して小宮山に、愛国心と祖国愛の違いを気づかせるきっかけを与えることになった。

創作「楯に乗って」には、国家を愛することと「くに＝故郷」を愛することは異なるというメッセージが含まれていた。国境を外に拡大する愛国心・植民地主義は、戦前の二の舞になるが、外に向かわない祖国愛（隣人との結びつきを大切に考える方）を互いに認め合うならば、隣国人との間でも戦争が引き起こされることはない。外に向かわない代わりに、外からも向かってこない関係を、いかに創るかという問題である。それには、同じ考えをもつ統一体質の人間を世界中に増やしていかなければならない。

しかし、アメリカは戦争を早期に終わらせるた

めと称して、東京大空襲をはじめ戦闘員ではない都市住民への空爆と広島・長崎への原爆投下を行った。これは隣人との結びつきを大切にす祖国愛にもとる排外愛国主義的な行為である。小宮山の小説に込めた想いは、GHQからすれば、そのような脈絡で受け止めざるをえない。検閲官のさきの発言は、統一体質を失えば日本に二度目の、真の敗戦がやってくるという小宮山の警告を、偽りなき警告ではあるが断じて認めるわけにはいかない危険な警告と受け止めた上で、それに対しては全面削除で臨むという毅然たる立場表明だったのである<sup>65)</sup>。

謝辞：本稿の作成に当たっては、Editor's Museum（小宮山量平の編集室：代表 荒井きぬ枝）に所蔵されている貴重な資料を利用する便宜を図っていただくことができた。ここに記して感謝の意を表します。

## 注

- 1) 小宮山には、幼少時から30歳で迎えた敗戦までを扱った自伝風の小説『千曲川』全4部（理論社、1997-2002年）がある。編集者・出版人になる前までの創作であるが、書き残された他の論考と比較しても自伝と呼んでも差し支えない作品である。本稿では、この小説の記述をも、創作であることを踏まえつつ、適宜引用する予定である。
- 2) 「一出版人の原体験」の初出は、1982年2月の『信濃毎日新聞』夕刊に19回連載された。その後、信濃毎日新聞社編『来し方の記』（信毎選書4、1982年）および小宮山量平『編集者とは何か』（日本エディタースクール出版部、1983年）に再録。
- 3) 小宮山を論ずるにあたって、本来であれば理論社を創業したあと社会科学・人文科学の分野から創作児童文学の分野へと転進を遂げたその経過を詳細に辿る必要があるが、本稿の関心は小宮山という一出版人の「原体験」の方にある。そのため、彼の社会認識や思想がどのように形成されたのか、に力点をおいて検討を進める。なお、編集者・出版人として

- の小宮山については、差し当たり、塩澤実信「児童文学の夢を育てる・理論社」(『出版王国信州の山脈』郷土出版社、1994年、所収)および小宮山へのインタビュー「出版文化を想うとき」(『地域文化』(八十二文化財団)通巻68号、2004年4月、所収)を参照されたい。
- 4) 前掲『編集者とは何か』p. 258。
  - 5) 小宮山『昭和時代落穂拾い—“回帰の時代”によせて』(週刊上田新聞社、1994年) p. 109。
  - 6) 小宮山『千曲川 第2部 青春彷徨』理論社、1999年、pp. 56-58。
  - 7) 同『千曲川 (第1部) そして、明日の海へ』理論社、1997年、pp. 286-89。
  - 8) 前掲『千曲川 第2部』pp. 147-48。なお、小宮山『戦後精神の行くえ』(こぶし書房、1996年、p. 57)では、この事件を「昭和11年」としているが10年の誤記であろう。
  - 9) 第68・69代内閣総理大臣。1933年、23歳の時に東京商大に進学。なお、杉村は「左右田喜一郎の学問的伝統を継いで、日本で最初に『経済哲学』ということ提起した人物で、のちの宰相・大平正芳、あの大平さんが、杉村先生の崇拜者なんですよ」(前掲『戦後精神の行くえ』p. 56)、と小宮山は記している。また、大平の伝記を著わした辻井喬『茜色の空』(文春文庫、2013年、p. 34)も杉村に言及している。
  - 10) この講演会を含めて、当時の東京商大の状況については、小宮山へのインタビュー「個性は主張する **One and Only One**」(一橋大学広報委員会編『HQ (Hitotsubashi Quarterly)』Vol.9、2005年10月、pp. 43-48、所収)を参照。
  - 11) 前掲『千曲川 第2部』pp. 158-59。
  - 12) 荒井民平〔小宮山量平〕「いちばん高い波頭の上に」『理論』第5号、1948年7月。
  - 13) 以下の叙述に当たっては、前掲『戦後精神の行くえ』p. 60、p. 64-66を参考にした。
  - 14) この著作は、その後水田洋によって増補され、書名も『イギリス社会哲学の成立と展開』と改められて、1971年に社会思想社から刊行された。なお、編者の水田は「あとがき」の中で次のように述べている。「大正末期から昭和初期の一橋にまなんだ著者にとって、リッカーの高弟左右田喜一郎の影響は、決定的であった」。太田と杉村とは、左右田の兄弟弟子であった。
  - 15) 前掲『千曲川 第2部』pp. 80-81。
  - 16) 前掲『昭和時代落穂拾い』pp. 118-19および『千曲川 第2部』pp. 275-80。
  - 17) 前掲『千曲川 第2部』pp. 292-302。
  - 18) 小宮山『千曲川 第3部 青春回帰』(理論社、2000年) p. 140、167、170。
  - 19) 同前、pp. 241-43。
  - 20) アジア・太平洋戦争の戦況の変化について、比較的最近の研究として以下の文献を参照。一ノ瀬俊也『銃後の社会史』吉川弘文館、2005年。吉田裕『アジア・太平洋戦争』岩波新書、2007年。川田稔『昭和陸軍全史』1~3、講談社現代新書、2014-15年。手嶋泰伸『日本海軍と政治』講談社現代新書、2015年。
  - 21) 小宮山『自立的精神を求めて— 季刊『理論』の時代』(こぶし書房、2008年) pp. 70-72。
  - 22) 小宮山『千曲川 第4部 青春新生』(理論社、2002年) pp. 32-33。
  - 23) 同前、pp. 153。
  - 24) 前掲『戦後精神の行くえ』pp. 54-56および『自立的精神を求めて』pp. 65-68。
  - 25) 小宮山「五味川純平作品の魅力」(五味川純平『人間の条件』(下) 岩波現代文庫、2005年、所収) pp. 596-97。なお五味川は、小宮山より1年早く東京商大に入り、1年間で退学し東京外国語大学に移り、卒業後に鞍山の昭和製鋼所に就職している。小宮山とは大学時代はすれ違いであったが、教員か先輩とのパイプで繋がっていたのであろう。
  - 26) 小宮山『地には豊かな種子を』(企画・監修 榊 自然と人間社、2006年) pp. 189-94。
  - 27) 前掲「五味川純平作品の魅力」『人間の条件』(下) p. 594。
  - 28) 前掲『戦後精神の行くえ』p. 67。
  - 29) 小宮山『やさしさの行くえ— “受容の時代”によせて』(週刊上田新聞社、1997年) pp. 68-69。
  - 30) 小宮山『『敗戦』三十年を考える』〔初出、1975年〕『出版の正像を求めて— 戦後出版史の覚書』(日本エディターズスクール出版部、1985年) pp. 120-22。
  - 31) 小宮山『20世紀人のこころ— “漸進の時代”によせて』(週刊上田新聞社、2001年)

- pp. 106-07。
- 32) 前掲『自立的な精神を求めて』 pp. 12-14。
- 33) 前掲『やさしさの行くえ』 pp. 213-14。
- 34) 同前、pp. 238-39。
- 35) 同前、pp. 244-45およびpp. 122-23。
- 36) 前掲『昭和時代落穂拾い』 pp. 222-23。なお、貸本として使われた当時の蔵書のすべては、その他の蔵書や未来社の出版物とは別置されて、上田駅前若菜館ビル3階のEditor's Museum (小宮山量平の編集室) の書棚に収められている。また、青年団や自主サークル主催の研究会は、年に100回ほど開かれた(前掲『戦後精神の行くえ』 p. 85)。
- 37) 前掲『自立的な精神を求めて』 p. 122。なお、小宮山は「戦後すぐのその時期に共産党と接触する機会があったけど、党に属したり支配を受けたりする立場にはなかった」と述べている(前掲『戦後精神の行くえ』 p. 85)。
- 38) 前掲『20世紀人のこころ』 p. 161。
- 39) 以下の叙述に関しては、大槻宏樹編『山越脩蔵選集』(前野書店、2002年) pp. 70-75およびpp. 112-19、小平千文ほか『上田自由大学と地域の青年たち』(上田小県近現代史研究会〔ブックレット11〕、2004年) pp. 46-54を参照した。
- 40) この「趣意書」は長野大学附属図書館に所蔵されている。なお、趣意書の末尾によれば、上田自由大学の事務所は「上田市祝町 上田絹毛会社内」に置かれていた。しかし、「講座案内」および「聴講券」が残されているが、その発行は「上田駅前千曲文化クラブ内 上田自由大学」と記されている。事務所と千曲自由クラブとの関係は不明である。
- 41) 案内文を送った7人は、金井正、山越脩蔵、猪坂直一、竹内精司、中沢鎌太、堀込義雄、石井清司で、いずれも大正期または昭和初期の自由大学の世話人または受講者である。
- 42) 前掲『自立的な精神を求めて』 pp. 120-121。
- 43) 前掲『戦後精神の行くえ』 pp. 87-90。
- 44) 小宮山の自由大学運動への言及には、例えば以下のものがある。「上田自由大学の実践に学ぶ」(『上田自由大学に学ぶ今日の生涯学習』上田市教育委員会、1997年、所収) pp. 6-15 および「新しい自由大学運動よ、起れ」(『映画は《私の大学》でした』こぶし書房、2012年、所収) pp. 176-182。また、上田西校時代の担任であった柳沢義信は、信州自由教育の実践者であることは小宮山が指摘している通りであるが、大正期の自由大学の受講者でもあった。「信濃自由大学会計簿」によれば、1921年11月の恒藤恭の講義、1922年1月の出隆の講義、同年10月の土田杏村の講義を受講している。
- 45) 前掲『編集者とは何か』 p. 263。
- 46) 前掲『自立的な精神を求めて』 pp. 35-36。
- 47) 季刊『理論』の「本誌の特色」の全文は、前掲『戦後精神の行くえ』 pp. 134-36にも再録されている。
- 48) 小宮山「『季刊理論』を始めた頃」(初出:『思想の科学』1959年12月)、前掲『編集者とは何か』 pp. 116-34に所収。引用はpp. 123-24。
- 49) 同前、pp. 124-27。なお、注64)も参照されたい。
- 50) 同前、pp. 129-31。創造的とは訓詁学を意識して用いられている。
- 51) 前掲『戦後精神の行くえ』 p. 160。
- 52) 鶴見俊輔「舞台転換」。なお、この推薦文は、前掲『自立的な精神を求めて』のpp. 217 - 218に採録されている。
- 53) 前掲『自立的な精神を求めて』 pp. 77-84。
- 54) 前掲『戦後精神の行くえ』 pp. 90-93および『昭和時代落穂拾い』 p. 237。
- 55) 前掲『自立的な精神を求めて』 pp. 56-57。
- 56) 前掲『戦後精神の行くえ』 p. 91。
- 57) 前掲『やさしさの行くえ』 pp. 58-59。H. ノーマンは、軽井沢生まれのカナダ人、日本史研究者、外交官。戦後、太平洋問題調査会(IPR)を中心に極東委員会・対日理事会で活動。マッカーシズムの赤狩りに追いつめられエジプトで自殺した。K. ウィットフォーゲルは、フランクフルト学派の一員であったドイツ人。ナチスの政権獲得後、アメリカに亡命。東洋史とくに中国の社会経済史研究で活躍した。
- 58) 前掲『昭和時代落穂拾い』 pp. 240-43。なお、当時の検閲の残骸を本国に運んで資料室に収めたのは、メリーランド大学である。同大学プランゲ文庫および日本人職員村上寿世を介して小宮山の「生原稿のゆくえ」を辿ったエッセ

- セイに、山寄庸子「本の森に囲まれて——私の図書館修業時代（エディターズ・ミュージアム⑤～⑰）」（『週刊上田』2012年11月10日～2013年2月9日、所収）がある。
- 59) 前掲『戦後精神の行くえ』p. 93。
- 60) G.オーウェル「ナショナリズム覚え書き」（『水晶の精神』〔オーウェル評論集2〕平凡社ライブラリー、1995年、pp. 35-74）および鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの』（新曜社、2004年）pp. 185-88参照。但し、オーウェルの訳書ではpatriotismに愛国心の訳語を当てている。
- 61) 前掲『千曲川 第4部』p. 8。なお、引用のひらがなは原文ではカタカナ、カタカナはひらがなで表記。また、同書のp. 384で、小宮山は『千曲川』の執筆動機を次のように語っている。「私の作品〔楯に乗って〕に対して検閲の青鉛筆を揮ったあの時代の、あの不寛容に対して、改めて異議申し立てをする程の思いをこめて描かねばという思いが募った、と。
- 62) リベラリズムは普通、自由主義と訳されるが、ここでは権威や権力から自由になる（それらに縛られない）という意味で使用している。また、折衷主義eclecticismという用語は、1つの体系に依拠するのではなく、複数の体系から正しいと思われる要素を抜き出してきて1つの体系にまとめる立場を指す。
- 63) 前掲「五味川純平作品の魅力」『人間の條件』（下）p. 595。
- 64) 安江良介（1935-98年、岩波書店元社長）は、信濃毎日新聞夕刊の「今日の視角」（1994年3月5日）で、小宮山の『昭和時代の落穂拾い』の読後感を次のように記している。「私は、今日の時代相の一面は、『歴史の連続性』を確信できないニヒリズムであり、現実に正面から取り組む力の不足、あるいは、個の怠惰だとあらためて思った」（安江『同時代を見る眼』岩波書店、1998年、pp. 223）。
- 65) アメリカにとっては厳しい批判が、小宮山の先輩にあたる小学校長の小林多津衛（1896-2001年）からも寄せられている。小林は、極東軍事裁判の判決が報道された直後の1948年11月14日にマッカーサーに手紙を認め、今次の「真の戦争原因」は、「自国のみの繁栄を願う国家主義」にあり、その限りで「勝者も敗者も同罪」であるから「共に殺戮し合った罪を謝し、絞首刑の如き殺人の罪を自ら重ねることなく、戦犯者に禁錮等の刑によって終身反省思索の機会を与え」るべきである、と主張した。返事はなかったが、黙殺する以外になかったのであろう。白井吉見『安曇野』第5部（筑摩書房、1974年）その九、その十、pp. 165-66、205-08。